慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人生の意義及価値（第三回）：ルードルフオイケンの新人生観
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.3, No.1 (1910. 1) ,p.51- 64
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100115-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

は却て良好なるものある可し。今は徒に勞働者の無能無節制を云爲して其組織を妨害又は抑制す可き時に非ず。世の先覺者たる者は先づ翼進的態度を取りて之に莅む可きなり。自家の利益確保に注意周到なる勞働者を使役するは企業家の爲に一大不快たるの觀なきに非ずと雖も、能く自他の地位責任を覺知し、知慮あり節制ある勞働者を使役することの却て無智無節制なる徒輩を驅使するよりも有利且つ容易なることは勞働組合の發達せる邦國の企業家の一般に認識せる所なり。先覺の企業家たる者若し自ら進んで勞働者の組織に對して翼進的教導的態度に出で、勞働者の組織に對して抑壓的敵對的の精神を抱くことなく、却て勞働委員會、共濟的團體其他の平和的組織を皷舞推奬するの擧に出でば勞働者の地位翼進と勞働關係の平和的調理とは兩ながら之を達し得るに庶幾らんか。勞働者に對しては勿論、世間先覺の識者企業家に對しても亦此組織と其善用慣熟とに盡力せられんことを望むや切なり。

人生の意義及び價値（第三回）

（ルードルフオイケンの新人生觀）

川合貞一

一　藝術家的主觀主義の人生觀

自然主義及び社會主義の潮流は現代の文化生活に於いては多く結合して共同の結果を生じてゐる兩者は差別があるには相違ないが頗る近似したもので孰れも直接的存在を以つて人間の唯一の世界としてゐるのみならず生活をば全然環境に對する關係の中に置き自然科學的工藝的と實際的政治的との差はあるが兎に角外界に對する勤勞よりあらゆる幸福を豫期してゐるのであるかくて兩系統の文化なるものは全く勤勞文化（アーバイトクルツーア）の性質を帶んでゐるのである所が勤勞文化に於いては努力の向ふ所は何等かの働を爲し思惟の向ふ所はよりよき將來を來さんとするに在るそこで疑が起つて來ると云ふのは吾々は一體無心な文化の過程の器械となり手段となつて役立つが爲めに存在するものであらうかと云ふことである一度かゝる考が起つて來ると文化の目的が疑はるゝやうになり勤勞其物も

何んだか自分を奴隷にして遂には生血を吸取つて了ふものであるかのやうに思はれるやうになるさうなつて來ると再び勤勞の主人公となり生活の自在（バイシヒセルブストザイン）を失はざらんとするが急務中の急務と考へられるやうになる。藝術上の運動が種々起つて來て生活が自づからに復歸し存在の喜びと其の深みに達せやうと云ふ要求が益々強くなりつゝあるして其の多樣なるが中に現代の特有なる地盤の上に立ち直接的存在の手段で以つてこの要求を癒さんとするのが主觀主義及び個人主義の人生觀であるこの人生觀は獨特の藝術と融合し其の力を得て大膽にも吾々の全存在を支配し形成せやうとする。

經驗の範圍を離れずして勤勞文化の手より遁れ出でんとするものには自存性を有する個人より外にたよる處は殆んどありはしないのである蓋し他の人生觀では個人と云ふものが不可見的思想界若くば可見的組織の中に屬してゐて其の活動もこれによつて規定せられ其の力の發展も一般秩序の框の中に嵌る丈けより喚起せられなかつたのであるがそれがあらゆる束縛を脱して自づからの能力に依賴し自づからの決定より外如何なる尺度も認めぬと云ふことゝなり且つ自

づからの中に常に存する所のものを發展させるには如何なる秩序をも顧慮するを要しないと云ふことゝなつたかく最上權を得た所から現代の個人は從前の狹い束縛せられた個人に較べるとずつと廣いものとなり大なる意義を有するものとなつた實に近代人は身邊にまつはる所の關聯を離れて大膽に世に對し從來は當然と思つてゐた所のものに向つても深く考へるやうになり益々自由を得るに至つたして見ると現代の個人が自己を中心とし全人生を其れから形成せやうと企てるのも決して怪むに足らぬ一體個人は自分の心に於いて可成的外部との關聯を斷ち自由に翺翔する主觀として生活する場合に於いて始めて充分なる獨立に達することが出來るのであるがさう云ふ境涯は主として何等の特別な對象にも束縛せられずあらゆる形式や形象を超越せる氣分（スチムング）に於いて現はれるのであるこの氣分が卽ちローマンチックによつて獨立の地位を得た所のものである此處に於いて生活の自由翺翔內的無限完全なる獨立が獲られ各の主觀は自づからの途を進み自づからの眞理を有すかくて何等制限せられざる自由な人生と云ふものが生じて來るやうに見えるのである。

がこの氣分生活も時代の大潮流たる今一つの運動と結び付かなかつたらば恐らく空なものとなつて了つたであらう其の運動とは何んであるかと云ふと卽ち藝術の運動である否美的人世觀の運動である古から人間の努力を通じて人生を倫理的に形成せやうと云ふのと美的に形成せやうと云ふのとの對立が存してゐる一は主として現實に對する活動的態度で他は主として觀照的態度である一體人間の活動は近世の生活系統に於いては主として勤勞文化功利文化の形を取つて現れてゐるのであるが是れに對して美的觀照的の考へ方が美と喜と生活の自在とを與ふるが如く思はれる所から優越してゐるものと感ぜられるのも尤な次第である所が藝術の運動は主觀の生活と融合する所から狹い途に陷ゐり一種の性質を得るやうになつたのであるそこで藝術なるものが客觀の理解よりも重きを主觀の興奮に置き內容や結構に注意するよりも重きと變轉常なき氣分の描寫に置くこととなり謂ひやうのない形の與へやうのないあるものを何んとかして描き出さうと云ふのが其の任務となつたのである。

文學及び藝術の方面から特有なる生活の型が現はれて來て各方面に其の特色を發揮し人間の全存在をして積極的に向はしめ人生をして活動喜悅快樂に充たしめやうとしてゐる古い人生觀殊に宗教的のそれに於いては餘りに禁慾に過ぎ餘りに生の否定に過ぎたのであるかゝる生の否定は今や樂しき生の肯定に其の地歩を讓らなければならぬことゝなつたのである蓋し活潑々地の主觀性の觸るゝ處人間に關するあらゆるものをして悉く力と化せしめざるはなしである上に生活其物が美化される所から存在の苦を去り力の自由な活動が全存在をして安らかならしめる。

かう云ふ自由な愉快な自在（バイジヒザイン）の人生と云ふものは全く貴族的個人的の性質を具へたものである經驗の示す所によると獨立的創造及び生活に對して力と勇氣とを見出すものは唯少數の人に限られてゐて多數はこれに與らないのである蓋し個人性の充分なる意識なく有力なる分化と懸隔なくしては人生なるものは其の充分な高さに達することが出來ないやうに思はれるそこであらゆる生活關係あらゆる生活現象を可成的個人的に形成することが必要となつて來るのであるかくの如く吾々の存在を個人化すると云ふことが時間に對する關係の上にまで及

んでゐるのであると云ふのは一の刹那は他の刹那の犧牲に供せらるべきではない又現在は將來の準備の爲めに費さるべきでもない刹那刹那が全く其れ自身目的であつて人生なるものは要するに現在の上に置かるべきものだと云ふのであるから云ふ點が無限の鏈鎖中に個人を入れて了ふ所の勤勞文化と甚だしく反對してゐる處である

が最も特有な點は精神的のものと感覺的のものとの關係に對する見解に現れてゐる藝術家的主觀主義では精神的のもの丶獨立を認めこれを感覺的のものと對立せしめると云ふやうなことは不可能であつて精神的のものは常に感覺的のものと相結び相まつはつてゐるものと考へる從つて感覺的のものを精神化し精神的のものを感覺化すると云ふことが其の最高目的となつて來るのであるかくの如く感覺的のものを尊重して精神的のものと同列に置くと云ふことが古い人生觀わけて宗教的理想主義と最も其の趣を異にしてゐる處である。

かう云ふ根本的性質から一々の生活財寶及び生活範圍に對して特有なる關係が生じて來るのである卽ち美的人生觀では藝術的文學的創造なるものが新人陶冶の工場として人生の心核となり政治的社會範圍はほんの外的世界に沈んで了ふのである而して人を共同の秩序の中に入れやうとする所のものはそれが國家であらうと社會であらうと悉く引込んで了ふ所から個人と個人との自由な關係が益々力を得て來るのであるわけて男女兩性の相互關係が主要なものとなつて來るのである若し近代文學から戀愛の要素を取り去つたとしたらば如何にもつまらぬものとなつて了ふであらう而して又其の男女の關係なるものが全く自由なもので一定の規範や傳來の習慣を認めるのは弱い表徵で俗人の考へだとせられる。

かう云ふ工合に傳說や環境の妨礙を排して美的人生觀を行はうとする所からわけて傳來の宗教及び道德に對して酷く撞突するやうになるのである一體この人生觀では精神界の獨立と云ふものを認めず精神的のものと感覺的のものとの融合を以つて唯一の世界と考へてゐるのであるからそれからして宗教少なくとも從來宗教と云はれてゐるものを排斥せざるを得ぬのである且つこの人生觀では始めから人生を肯定してかゝつてゐるのであるから宗教の出發點を全く理

解することが出來ず宗教を以つて弱みの幻想と考へてゐるのである道徳に就いても宗教と別に變りはない此處に於いても亦其の本質の必然性の證明が缺けてゐるのである何の理由あつて人は主觀の外に横つてゐる所の規範を認めて自然の生活本能を制せなければならないのであらうか實に精神的活動と幷が利害の分別とを去うて考ふれば善と惡との對立は何等の意義も權利もないものになり人間の嚴令によつて現實を勝手に引離したに過ぎないやうに思はれるこの見地よりすると通常道徳と呼ばれてゐる所のものは個人の獨立を奪つて己れに從はせるが爲めに社會が制定したものに外ならぬのものとなるのである。

かゝる人生觀を批判せやうと云ふには其の目的と手段とを峻別せなければならぬ目的に就いては殆んど何等の疑も反對もあり得ないのであるが其の手段は果して目的を達するに足るであらうか頗る疑はしい。

人が外界に對するあらゆる關聯を去りて生活の自在（バイジヒザイン）を欲すると云ふことは偉大なことには相違ないが頗る困難なことである蓋し吾々は外的生活に於いて丈けではなく心の奧底までも自然と社會との二つによつて束縛せられてゐるのであるが主觀主義は如何にしてこの力に對して獨立的生活を營まうとするのであらうか其の手段とする所は自由に翺翔する氣分を喚起すると云ふのであるが事實上人は氣分によつて己が心の主となることの出來ないものである蓋し氣分に存する現象は確乎たる關聯を缺いてゐるものである生活の内的構成を缺いてゐるものである何故かと云へばこれ程變轉常なきものはないからであるして見ると氣分生活と云ふものは皮相な生活であつて人生が決してこれによつて其の深みに達し内容獨立を得るものではない唯獨立の假（ミカケ）に過ぎないのである人生が眞の獨立を得やうと云ふには勤勞によつて内界（インネレヴエルト）を生じ而してそれが外界に對抗し得るに至らなければならぬ氣分其物と精神的深みとは決して混ぜらるべきものではない内的無限に根ず所の人格と變轉常なき氣分の人とは峻別しなければならぬ。

かくて主觀主義の唱る所の社會的環境に對する個人の獨立優越と云ふものも唯假（ミカケ）に過ぎないものとなる蓋しこの主義で個人性の發展と云つてゐる所のものも人生の自在ではなくして寧ろ民衆のそれとは反對の事を言ひ反對の事を爲る

傾向の出來ることを云ふに過ぎぬそれでは決して環境の束縛を脱したものと云ふことは出來ない間接ながらやはり一種の依屬である其の上主觀主義では個人を抑壓して小さくして了ふ所の社會の制度を取り去つて了へば立派な個人的文化が榮えるものと思つてゐるが其點は丁度社會主義で外部の妨礙さへ取り去つて了へば立派な生活が生れ出るものと思つてゐるのと異りはないが各人に具つてゐる特性がすぐに何等かの價値を有し生活の中心となるに足る個人性と云ふものであらうか決してさうではない實を云へば眞の個人性には內的統一が存してゐなければならぬこれは唯天惠によつて出來て來るものではなく勤勞の結果であり修養の結果であるのだ古來の偉人が如何にして眞の個人性を發揮したかを見れば容易に此の理が解されやう。

新生活あるものは唯獨立的であり個人的であるばかりでなく大であり力でなければならぬのであるが其の大と力とには氣分を發展せしめ養成した丈けで達せられるものであらうか氣分なるものは無論優越した力の感情に高められはするが然かしこれも唯力の假象であつて眞の力となり得るものではない氣分其物と眞の力とは調和すべからざるもので氣分の確定養成は人生を美化し得るには相違ないがそれと同時に人生を纖弱ならしめる所のものである一體力なるものは唯抵抗に對する奮闘によつて始めて發展するものである然るに美的主觀主義では精神生的を容納的觀照的に解し現實を受納し反影し享樂するに止めてこれに覺醒向上の力を與へないのである。

生活をして全く積極に向はしめ直ちに生の肯定に進まうと云ふ企は力の要求と密接な關係を有つてゐるもので自づから小にして引込で居ると云ふやうな考へ方を斥ける段は歡迎すべきであるが然かしこれも藝術家的人生觀の考へてゐるやうな單純なものではないのである如何なる精神的運動でも究極する所生の肯定を拒絕し得るものではない原始佛敎のやうな純然たる厭世主義の系統であつても其の否定を緩和して肯定に轉ずるにあらざりせば多數の信奉を受くることが出來なかつたのであるが人間の經驗上直ちに生の肯定に進むことが果して可能であるか終極の肯定に進む途は力ある否定を經べきものではなからうかと云ふのが疑問である人が基督敎の信條や制度に對して如何樣な意見を懷かうと

もそれが人の心の世界に對する關係の中に存する限りなき葛藤を發見し苦痛を以つて生活の心核とし精神と愛の世界を啓いてこれに打勝たんとした事實は打消す譯には行かない生活はこれによつて困難になつたには相違ないが然かし大さと深さと内的運動とを得たのである要するに苦痛の存せない生活は平板に流れて了つて堪へがたきものとなるのである。

道德の問題に對する主觀主義の關係もこれと變りはないこの主義が傳來の制度を攻擊するのは尤な譯であるが然かして民衆の達ずるやうな低い道德を以つて其の本質と考へ其の深みに横つてゐるあらゆるものに目を閉ぢてゐるのである而して生活を氣分生活に狹めて了ふ所から其れ以上に出づる所のものは何んでも幻想であるとして了うのである其上自然の本能があらゆるものを支配するとする所から責任の概念や善惡の區別を以つて小人的考へ（クラインメンシエリヘ）の方の所產で無用なものだとするのであるが實を云へば人間は精神の獨立を得て自然の狀態を超越し而して内的に自由に現實に對することが出來るのであるそこで眞の道德は自由に基づける新な世界の顯現となるのであるかくて責任なるものの存在が大の證據となり人間が宇宙の獨立な協力者たることを表ずのであるが自由な世界の傍に與へられたる世界がなほ存してゐる所から生活が高きものと低きものと自由と運命との劇しき衝突となるのである然し生活はこれによつて量るべからざる緊張を得て來るのである

精神的のものと感覺的のものとの關係に就いても同樣で主觀主義が感覺的のものを輕視するに反對するのは尤であると云はなければならぬさりとて感覺的のものを以つて精神的のものと同價値を有つてゐるものとすることが道理ありと云ふのではない要するに主觀主義では精神生活の獨立と云ふことを認めない所から其の結果は精神的のものを低く見ると云ふやうなことになり遂には肉感主義に陷ゐつて來るやうにもなるのである。

之を要するに主觀主義の強みは殊に批評に存してゐる傳來の生活關係の弊を訐き出した其の微妙な感じに在る然かし其の積極的な働に至つては全く矛盾を免れないと云ふのはこの主義では眼の前に横つてゐる所の存在の手段によつて獨立的な自家活動的な精神生活でなければ解決の出來ない問題を解かうとした

からである而して其が提供する所の主觀性と云ふものも純粹の主觀性ではなくして豐富な文化生活の基礎の上に發展した所の主觀性であるで主觀的美的生活なるものは成熟した否成熟し過ぎた文化に隨伴した現象であつて獨立な文化生活を自づから生じ得るものではない。

吾々は實に以上述べ來つた古い人生觀や新しい人生觀の紛糾錯綜たる間に立てゐるのである蓋し古い人生觀は新しい世界を啓きはするが其世界たるや吾々の存在とは懸離れたものとなり不確なものとなつて了つた之に反して新しい人生觀は直接的存在より出發したのであるが之を超越して撞着矛盾に陷ゐらずば其の終りを見出し得なかつたのである要するに現代の吾々には神も理性も疑はしいものとなり其れに代るべき自然も社會もはた個人も吾々を滿足せしめない而してこれより起る所の不安は生活を根柢までも震撼するに至つた是に於いてか既存の人生觀以外新人生觀が覔められなければならぬ新綜合が起らなければならぬのである。

（未完）

雜録

英蘭銀行に關する研究（一）

堀江歸一

アゼン大學教授エーアンドレアード氏著英蘭銀行史（A. Andréades—A History of the Bank of England. 1909. XXXIX. 455.）の英譯はフオツクスウエル氏監督の下にメレデス氏の手に成り、昨年倫敦に於て出版せられたり。筆を千六百四十年前後に於ける英國銀行丼に金融事情に起し、英蘭銀行創立當時の狀況より、千九百三年に至るまで、同銀行に關して起れる大小の事件を叙述評論し、何等遺漏する所あるを見ず。余が從來閲讀したる英蘭銀行史若しくは同銀行史論中、最も完全なるものを求めんか、第一に指を本書に屈せざるを得ず。茲に同書中、英蘭銀行の現狀研究に就て、最も重要の關係ある部分を譯出し、以て讀者の參考に供す。

堀江歸一識

第一　英蘭銀行と割引歩合

此重要問題を論ずるに當ては、左に掲ぐるが如き三種の項目を設けざる可からず

一、英蘭銀行の平均割引歩合並に其定期變動。

二、英蘭銀行割引歩合と市中割引歩合との比較

三、英蘭銀行割引歩合と佛蘭西銀行並に獨逸帝國銀行割引歩合との比較。英蘭銀行割引歩合が頻繁に變動する結果並に此現象の説明。

（一）英蘭銀行の平均割引歩合。其定期變動。秋季壓迫。

英蘭銀行の平均割引歩合は之を大陸諸國の銀行歩合に比較すれば概して低きに居れり。唯佛蘭西銀行歩合に比較して、高きを見るのみ。例へば千八百八十三年より千九百二年に至る平均に就て見るに、英蘭銀行の歩合は三分二厘なりしに、佛蘭西銀行の歩合は二分八厘、獨逸帝國銀行の歩合は三分四厘なりしが如し。又時期の關係より云へば、千八百五十四年より千八百六十六年に至る間英蘭銀行の割引歩合は上進するの傾向ありたるが、千八百六十六年以後は絶へず低落しつゝあり。今千八百四十四年より千九百年を六期に區分して、各期の平均割引歩合（元金百磅に對する利子金額）を表示すれば、左の如し。